

みどりかわりゅういき
緑川流域

石橋虎の巻

もくじ

なぜ緑川流域に石橋が多いの? 2
 石橋の生みの親「石工」たちの活躍 3
 どのようにして石橋はできるの? 5
 石橋づくりに携わる人々 7
 石橋と人とのかかわり 9

石橋ものがたり

三五郎が手がけた初の水路橋【雄亀滝橋】 11
 篠原善兵衛たちの団結が難所を克服【霊台橋】 13
 布田保之助の知恵が田畑を潤した【通潤橋】 15
 林田能寛の熱意が伝わった【八勢目鑑橋】 17
 石工たちは、優れた芸術家【下鶴橋】 19

石橋と観光

緑川流域の石橋が観光客を呼ぶ。 21
 石橋文化とおもてなしの心 23
 石橋観光モデルコース 25
 緑川流域の石橋たち【石橋マップ】 28

緑川流域石橋紀行 ※反対側からお読みください。

石橋に感謝 42
 御船町 40
 美里町 そのI 38
 美里町 そのII 36
 山都町 そのI 34
 山都町 そのII 32
 甲佐町・宇城市・宇土市 30



「石橋虎の巻」では石造りアーチ橋、つまり目鑑橋を中心に編集しています。

なぜ緑川流域に石橋が多いの?

現在、熊本県にはアーチ式石橋(目鑑橋)が約320基あり、そのうち緑川流域には80を超える大小さまざまな石橋が残っています。

今からおよそ9万年前までの阿蘇の大噴火により形成された緑川水系一帯。緑川の急な流れや深い渓谷などの地形的特徴や、加工しやすい岩石(熔結凝灰岩)が多かったことが、この地域に石橋が多く架けられた大きな要因でした。

そして江戸時代後期、長崎から伝わった石造りのアーチを架ける技術は、県北の菊池川流域へ伝わり、やや遅れて緑川流域や氷川流域へと広がりました。

氷川流域には、野津の石工や種山石工が技を磨き地域の土木工事に力を発揮しました。それらの技や力は緑川流域の惣庄屋に知られるところとなり、砥用や矢部へ出かけて橋を架け、甲佐や嘉島に堰を作るなど活躍しました。

野津石工の三五郎(のちの岩永三五郎)、種山石工の宇助、宇市、丈八(のちの橋本勘五郎)の名はよく知られています。

どのような理由で、どのような人々の手によって緑川流域の石橋が架けられていったのか、この「石橋虎の巻」でみていきましょう。



〈参考文献等〉

種山石工列伝(上塚尚孝著)
 砥用町の石橋(旧砥用町)
 緑川流域の石橋群魅力再構築事業報告書(熊本県上益城地域振興局)
 石橋物語—旅からはじまるものがたり—(熊本県上益城地域振興局)

石橋は生きている(山口祐造著)
 九州の石橋をたずねて(山口祐造著)
 肥後の石工(今西祐行著)
 ホームページ「肥後の石橋」(熊本国府高校)
 通潤橋 水が渡る橋(山都町図書館ボランティア「ピエロの会」)

※順不同



大地を潤す通潤橋は宇市、丈八、甚平ら総数41人の石工が手がけた。



通潤橋のモデルとも言われる三五郎作の雄亀滝橋 日本最大級の単アーチの壱台橋は宇助による架橋

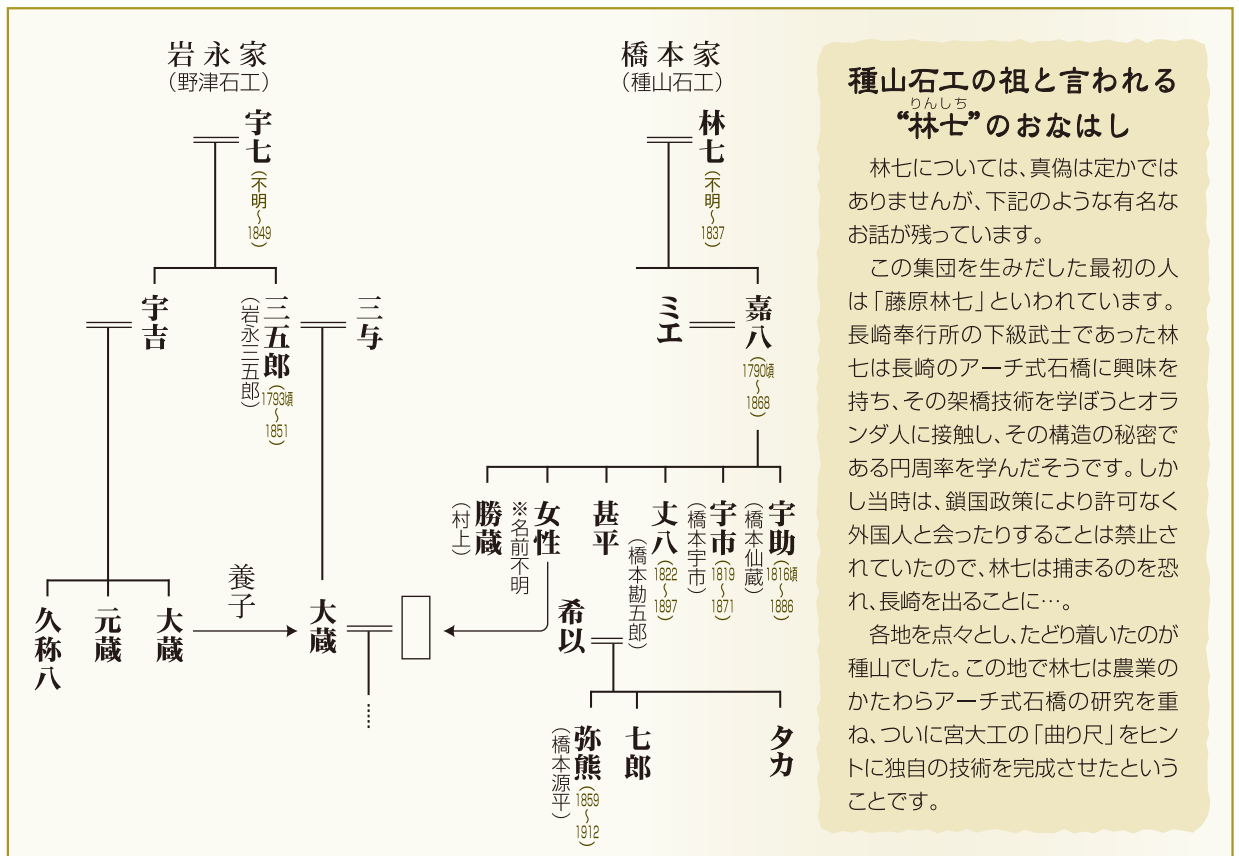


勘五郎と弥熊親子が4年を費やした下鶴橋

1 石橋の生みの親「石工」たちの活躍

緑川流域に石造りの目鑑橋がたくさん出来たのは、県北の石工仁平の技術の流れに加えて、八代地方の野津石工、種山石工を中心にした地元石工たちの活躍があったからです。

緑川流域で活躍した石工家系図



種山石工の祖と言われる「林七」のおなはし

林七については、真偽は定かではありませんが、下記のような有名なお話が残っています。
この集団を生みだした最初の人には「藤原林七」といわれています。長崎奉行所の下級武士であった林七は長崎のアーチ式石橋に興味を持ち、その架橋技術を学ぼうとオランダ人に接触し、その構造の秘密である円周率を学んだそうです。しかし当時は、鎖国政策により許可なく外国人と会ったりすることは禁止されていたので、林七は捕まるのを恐れ、長崎を出ることに…。
各地を点々とし、たどり着いたのが種山でした。この地で林七は農業のかたわらアーチ式石橋の研究を重ね、ついに宮大工の「曲り尺」をヒントに独自の技術を完成させたということです。

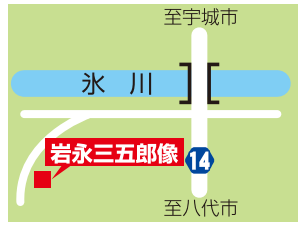
神業と言われた名石工

◎三五郎(のちの岩永三五郎) [1793頃~1851]

石工であった父・宇七と林七から知識と技術を学び、肥後の石工の中でも特にすばらしい功績を残しました。八代の干拓工事で活躍し、姓(岩永)を受けたこともその実績を物語ります。彼は、熊本初のアーチ式水路橋である「雄亀滝橋」や現在山都町では最も古い「聖橋」を架けました。その後、薩摩藩の強い要望により薩摩(鹿児島県)へ卦き、「甲突川の五石橋」などを手がけました。



八代郡鏡町にある岩永三五郎像



全国に肥後の石工の名を広めた

◎丈八(のちの橋本勘五郎) [1822~1897]

丈八は林七の孫(嘉八の三男)にあたり、種山石工の全盛時代に最も活躍した石工のひとりです。「通潤橋」や「御船川目鑑橋」の架橋に携わり、その実績から明治政府に招かれて東京でも「万世橋」や「浅草橋」などの石橋を架け活躍しました。(19ページ参照)丈八も姓(橋本)を名乗ることを許され橋本勘五郎という名前になったのです。



東京で撮ったという橋本勘五郎の写真

石工たちの活躍で石橋は各地にたくさん残されているんだね...



おもなできごと

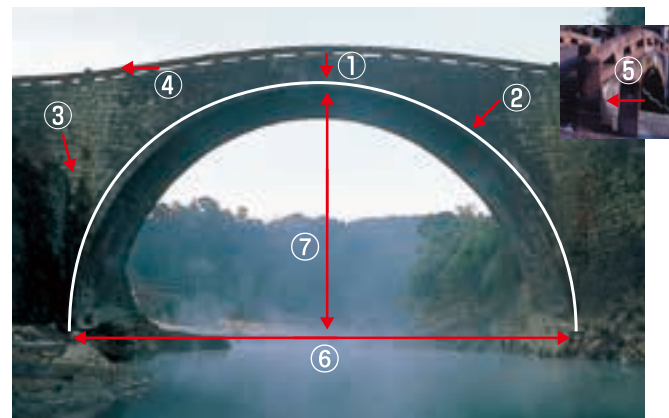
- 江戸
- 1607年 加藤清正が熊本城築城
- 1634年 日本最初の眼鏡橋(長崎)が造られる。
- 1774年 仁平石工により山鹿市菊鹿町に熊本最初のアーチ式石橋「洞口橋」が完成
- 1787年 藤原林七が現八代市東陽町へ
- 1793年 三五郎(のちの岩永三五郎)生まれる。
- 1818年 水路橋の雄亀滝橋(美里町)が完成
- 1822年 丈八(のちの橋本勘五郎)生まれる。
- 1837年 藤原林七死去
- 1847年 壱台橋(美里町)が完成
- 1851年 岩永三五郎死去
- 1854年 通潤橋(山都町)が完成
- 1855年 八勢目鑑橋(御船町)が完成
- 明治・大正
- 1873年 橋本勘五郎が明治政府の要請で東京へ
- 1897年 橋本勘五郎死去
- 昭和・平成
- 1988年 御船川目鑑橋が洪水で流出
- 1994年 東陽 石匠館落成
- 2003年 通潤橋史料館落成
- 2004年 通潤橋架橋150周年
- 2005年 八勢目鑑橋架橋150周年
- 2016年 通潤橋が熊本地震により被災
- 2018年 豪雨により通潤橋の石垣崩壊
- 令和
- 2020年 通潤橋が約4年ぶりに放水再開

2 どのようにして石橋はできるの？

それでは、緑川流域のアーチ式石橋はどのようにしてできるのでしょうか。なぜ、重い石が崩れずに百数十年も残っているのでしょうか。現在では新しく石橋が架けられることはありませんので、その構造まで理解している人はそれほど多くありません。専門家などによる研究は進められていますが、未だに謎も多く残ります。外観上は、いろいろな形のものがありますが、ここでは一般的なアーチ式石橋の構造をみてみましょう。

まずは石橋の用語を知りましょう。

石橋には、各部にいろいろな名称が付いています。「わいし輪石」「けいかん径間」など普段聞きなれない言葉ですが、石橋の構造や造り方を知るうえでは重要となります。ここで石橋の基礎用語を紹介します。



石橋は素材も大切

石橋は文字通り“石”で造られています。その石はどんな石でもいいというわけではありません。緑川流域の石橋の多くは阿蘇の噴火が生み出した熔結凝灰岩から造られています。丈夫だけど比較的加工しやすく、量が豊富にあるということがその理由。熊本では石橋の他、古墳の壁や石棺などに古くから使われています。

石橋基礎用語 その1

- ①要石 かなめいし
アーチ部分の最頂部に位置する石。“要”という文字が付くことから分かるように、石橋を造るうえで、最も重要な部分です。
- ②輪石 わいし
アーチを形成する石で、石橋の基礎になる大切な部分。両側から重ね、最後に要石をはめ込んで完成です。
- ③壁石 かべいし
輪石を積みながら壁石も積んでいきます。積み方も橋によってさまざまです。布積み、乱積みなどがあります。
- ④欄干 らんかん
安全に橋を渡るために付けられた手すり。
- ⑤親柱 おやばし
欄干の両端に取り付けられる装飾的な4本の柱。橋の名前などが刻まれていることが多い。
- ⑥径間 けいかん
アーチの両脚間の距離。
- ⑦拱矢 きょうし
輪石の一段目からアーチの頂上までの高さ。

構造を学ぶと楽しみ方が増えます。

石橋がどのように架けられるのかを知ることで、橋の見方がグッと広がります。下記の「アーチ式石橋が完成するまで」を読んで、その過程を知ると構造上の特徴がどこに表れるのかが分かります。

「要石はどこにあるのか」と探してみたり、輪石や壁石の積み方、欄干の装飾などを見てみると、構造の違いに気づくことで、石橋一つひとつの個性が見えてきます。その構造の不思議が理解できたとき、石橋の素晴らしさを実感することでしょう。



この部分が要石。いろいろな橋で探してみよう。

石橋を下から見上げてみよう。美しく並んだ輪石の構造が良く分かるよ。



特徴もいろいろ

基本的な石橋の造り方を基にさまざまな工夫がほどこされている石橋があります。例えば、人や馬だけでなく水を通す「すいろきょう水路橋」や広い川に架けるためにアーチをつなげた「れん2連アーチ橋」などです。

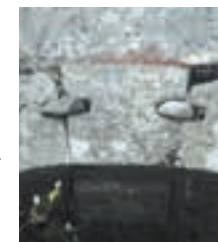
それぞれに石工たちが試行錯誤を重ね、技術の粋を結集して造られた緑川流域の石橋群。架橋の過程には、今では想像できないほどの苦労があったことでしょう。



水路橋 (雄亀滝橋)



2連アーチ橋 (金内橋)



門前川橋 (御船町) は輪石に楔を打って強度を高めています。

下鶴橋 (御船町) の親柱の添石には徳利と杯がデザインされています。



アーチ式石橋の架橋の様子が分かる貴重な写真
提供: 東陽 石匠館

アーチ式石橋が完成するまで

① まずは支保工を組む。



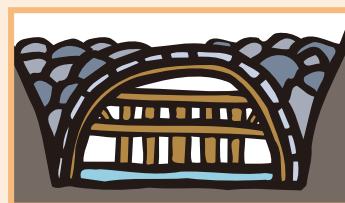
アーチ式石橋の基礎となる輪石を組み上げる土台となる支保工を大工さんが木で組みます。ここが一番大切です。川底は水が流れるよう柱立します。

② 輪石を組み、要石をはめる。



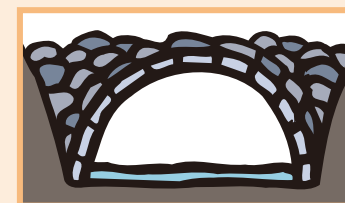
支保工の上に、両端から順番に輪石と壁石を積みます。頂上に要石をはめ込むと、石橋の基礎ができあがります。

③ 支保工をはずす。



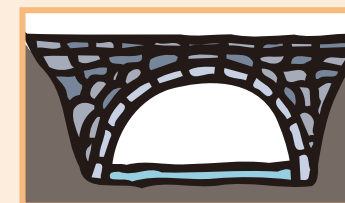
ここで支保工を少しずつはずします。輪石がしっかりと噛み合わされる瞬間が石橋を造る過程の中で、もっとも緊張する場面です。

④ 壁石を積み重ねる。



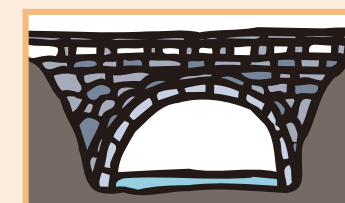
完成したアーチの上に壁石を積み上げていきます。積み方もさまざま、石橋の特徴のひとつになります。

⑤ 壁石を平らにする。



壁石を上まで積み、平らにするとひとまず石橋の完成となります。石橋の用途や資金不足などの理由で、ここまでの石橋も多くあります。

⑥ 欄干を取り付けて完成。



欄干を取り付けて石橋は完成となります。欄干にも実用面だけでなく、芸術的な造りなどもあり、見どころのひとつです。

3 石橋づくりに携わる人々

多くの人々が知恵と力を合わせて造りあげた結晶

石橋が架けられるまでには、石工以外にも多くの人々が携わります。

まず、もっと暮らしが良くなるために「橋を架けよう」と決心した人がいること。江戸時代では惣庄屋そうじょうやです。今なら町長、村長さん。藩(県)に許可願いを出します。また橋を架ける経費が必要です。中心になってお金を出す人(商人)をはじめ寄付も集めなければなりません。

仕事をする人(設計図をつくる人、土台となる支保工をつくる大工、山から石を切り出し、運び、図面通りに石を彫んだり、組み立てたりする石工や工事をする人など)をはじめ、食事の炊き出しなどの地元の人の協力も欠かせません。このように石橋は多くの人々の知恵と力の結晶でできあがります。



単一アーチ式の石橋として日本最大級の霊台橋の工事には、述べ43,967人が携わったという記録が残っています。

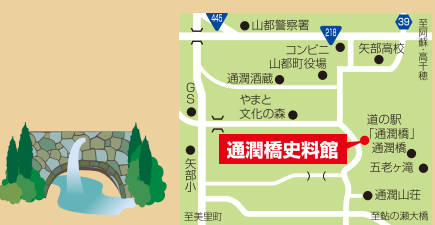
石橋づくりに携わる主な人々



すべてが手仕事の時代に、今ではとても想像できない難事業を、私たちのご先祖はそれぞれチームを組んで次々にやりあげたんだね。

◆石橋を学ぶ2つの施設◆

通潤橋史料館 (山都町) 国指定重要文化財「通潤橋」に隣接するこの史料館では、通潤橋架橋の物語が分かりやすくビデオなどで紹介されています。関連図書コーナーもあります。
問 TEL.0967-72-3360



東陽 石匠館 (八代市) 種山石工発祥の地に建てられた石橋の博物館。石工が使っていた道具や設計図など貴重な資料の数々が展示されています。石橋を学ぶなら、まずはここへ。
問 TEL.0965-65-2700

石橋架橋の重要人物“惣庄屋”

石橋を架けるうえで、工事の責任者、いわば事業主としての立場にあった惣庄屋は、技術者である石工と同じように重要な存在でした。石橋架橋にまつわる物語の中にも多くの惣庄屋が登場します。ここでは緑川流域で活躍した主な人物を紹介します。

ふたやすのすけ 布田保之助

(矢部手永惣庄屋) 【1801~1873】



若い頃より志高く、矢部手永の白糸台地の田畑に水を引くための通潤橋架橋に尽力しました。地域住民からその功績を称えられ、通潤橋近くの布田神社に祀られています。

<主な架橋>通潤橋、貫原橋、聖橋、浜町橋、金内橋、山中橋

※関連⇒15ページ

みすみじょうはち 三隅丈八

(砥用手永惣庄屋) 【1784~1843】



砥用地域(現美里町)に水を引くために、全長11キロメートルの柏川井手を造りました。その一部である雄亀滝橋は、熊本で最初の水路橋です。

<主な架橋>雄亀滝橋

※関連⇒11ページ

ささはらぜんべえ 篠原善兵衛

(砥用手永惣庄屋) 【1788~1856】



雄亀滝橋架橋に携わり、三隅丈八の後に惣庄屋になりました。多くの人々の協力を得て、当時としては最大規模の石橋「霊台橋」を架けました。その難工事には死をも覚悟していたと言われています。

<主な架橋>霊台橋、大窪橋

※関連⇒13ページ

うちだたえもん 内田太右衛門

(中山手永惣庄屋) 【不明~1852】



水利の便が悪かった美里町(旧中央町)萱野地区に水を引くために井手を掘り、風呂橋(水路橋)を架けました。地元の人たちはその功績をたたえ、今でも田植え後に「たえもんさん祭」を行ない、神酒を酌み交わし壺を祀っています。

<主な架橋>風呂橋

おやまきじゅうろう 小山喜十郎

(中山手永惣庄屋) 【不明~1854】



地域の発展のために宇土・八代から続く往還(矢部往還)を砥用・矢部につなげるために二俣橋を含め5つの石橋をつくりました。

<主な架橋>馬門橋、二俣橋(二俣福良渡、二俣川目鑑橋)、三由橋、山崎橋

※関連⇒17ページ

みつながへいぞう 光永平蔵

(木倉手永惣庄屋) 【1802~1862】



地域住民の強い希望を実現するために、寝食を忘れ金策に走り御船川に2連アーチの石橋「御船川目鑑橋」(昭和63年の大洪水で流出)を架けました。また、20キロメートル以上ある元禄井手と嘉永井手も手がけ、その功績は今でも語り継がれています。

<主な架橋>御船川目鑑橋、八勢目鑑橋

手永の位置



※現在の町と比べたときの大きな位置です。

木倉手永の豪商 林田能寛

【1819~1885】



現御船町で造り酒屋「萬屋」を営み、そのかたわら山海の産物の取引で巨額の富を得たと言われる林田能寛。御船川目鑑橋や八勢目鑑橋の建設に私財を投げ、地域に絶大な貢献をした稀有な人物です。

※関連⇒17ページ

4 石橋と人とのかわり

そもそも石橋はなぜ必要だったのでしょうか。大昔より人々が生活するなかで、川を渡る橋は必要でした。しかし、木の橋などは、洪水などの自然の力で壊れることも多く、そのために人命が失われることもありました。また、人だけでなく、大地を潤す水を渡す水路の役目として造られることもあり、頑丈で長持ちする石橋が必要となったのです。



石橋は人々にとって、なくてはならないものになったんだね!



人、物、文化の交流

川に石橋が架かると、わざわざ遠回りする必要もなくなり、移動時間の短縮ができます。しだいに人や物の往来も増え、違う土地同士の文化や技術の交流も進みました。また、水路橋として田畑を潤す水を運ぶことで、農作物の生産性の向上にも役立ちました。このように石橋は経済・文化の発展に大きく貢献しました。



立野橋は水路橋として田畑を潤す。



浜町橋は旧矢部町の中心地に架かる交通の要。



大小2連アーチの金内橋は地域の生活道。



門前川橋は子どもたちの通学路。

今でも現役、がんばっています。

石橋は100年以上前に造られたものも多いのですが、驚くべきは今でも現役で活躍している石橋があるということです。補強されてはいるものの自動車やトラックがその上を走ったり、昔と同じように田畑に水を送ったりと、当時の技術力の高さが実証されています。

また、田畑を流れる小川に架かり、農家の方が毎日のように渡っている橋もあります。

記憶に残る石橋

御船川目鑑橋(御船町)

昭和63年の大洪水で流失してしまった御船川目鑑橋は、名橋と呼ばれ、種山石工が架けた代表的な石橋でした。今でも人々の記憶の中にあり、復元を求める声が多くあります。

- 完成:1848年(嘉永元年)
- 特徴:2連アーチ橋
- 石工:宇助、宇市、丈八(橋本勘五郎)
- 長さ:60.08m
- 幅 :4.60m
- 高さ:不明
- 所在地:上益城郡御船町大字辺田見



石橋を守っていくために

今日、急激な社会環境の変化に伴い、強度や道幅など機能面から見た緑川流域の石橋の多くは、その必要性を失いつつあります。そのため、取り壊されて新しい鉄筋の橋が架けられることもあります。石橋はもう必要ないのでしょうか。

石橋は、私たちの先人が残してくれた大切な資源です。ふるさとの歴史を教えてくれたり、美しい姿を見せ感動を与えてくれたりと、今の時代に必要な新しい役割を持っています。この大切な地域の宝物をこれからも守っていかねばなりません。

①まずは、石橋とは何かを学びましょう。



石橋の歴史を知ることで、なぜ守る必要があるのかが分かります。

②実際に見てまわりましょう。



石橋と対面することで、学んだことがイメージになり、「守っている」という気持ちになります。

③みんなに教え、伝えましょう。



次は他の人に教えてあげましょう。石橋の輪が広がります。そして、歴史遺産として後世にも伝えましょう。

次の世代へと伝えていくために

人々の生活環境の変化の影響で、失われつつある石橋を守るため、今さまざまな活動が行なわれています。地域での伝承活動や学校での取り組みなど、それぞれの分野からの輪が広がり始めています。

未来へと石橋とその物語を残すためには、子どもから大人まで、地域の多くの人たちが石橋のことを学び、理解し、発信していく必要があります。

石橋語り部

緑川流域の石橋群の魅力を多くの人々に知らせ、伝えていくための活動に取り組んでいる地域の観光ボランティアガイド。現在石橋ツアーなどで活躍中です。

パンフレットには載っていない石橋架橋の物語や地域の昔の風景、その他エピソードなどを聞くことができ、質問などもできるので、石橋についてより詳しく学べます。



お問い合わせは
熊本県上益城地域振興局 総務振興課
TEL.096-282-3044





雄亀滝橋は、石工三五郎(のちの岩永三五郎)が手がけた熊本県でもっとも古い水路橋です。この石橋は、水が少ない田畑に水を引くための井手(水路)の一部になっており、通潤橋の手本になったとも言われています。雄亀滝橋の物語は、美里町砥用地域の農業を発展させる一大事業を成し遂げた人々の努力にまつわるお話です。

傑人が結集し取り組んだ大事業

美里町砥用地域は、山々に囲まれ、古くは水利の便の悪さから、農耕地としての発展が非常に遅れていました。そこで、1813年に砥用手永の惣庄屋であった三隅丈八は、当時の郡代であった不破敬次郎に願い出て、緑川の支流である柏川から水を引き、砥用地域の32ヘクタールの水田を潤す計画を立てました。

この事業では、後に霊台橋の架橋を指揮した篠原善兵衛や種山石工の三五郎(岩永三五郎)などの傑人たちが揃い、村人の協力のもと井手の工事が行なわれました。これが全長約11キロメートルにも及ぶ「砥用国始以来ノ大業」と言われた「柏川井手」です。

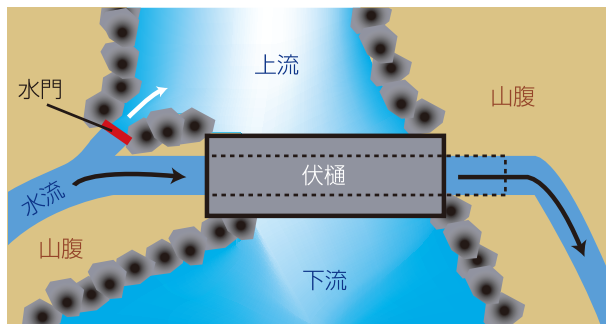
熊本最古の水路橋の完成

この工事の最大の山場は「雄亀滝橋」の架橋でした。橋が架かる谷はその険しさに三隅丈八が当惑したことから「当惑谷」と名づけられたほど。工事を担当した石工は名工と言われた三

五郎でした。

橋を架げるだけでなく、水路としての機能も有する技術的にも難しい工事です。建設には三五郎の技術はもとより、多くの村民の尽力が無くてはならなかったのです。難所を乗り越えられたのは、水を求める人々の団結があったからこそと言えます。

今なお山奥でその役目を果たしている水路橋は三五郎が最初に手がけた石橋で、通潤橋よりも36年前に完成しています。この熊本県最古の水路橋を完成させたことで、三五郎の名はさらに高まりました。



雄亀滝橋平面図

約190年の時を経て、今なお活躍中

柏川井手は深い山々を切り開き、水がうまく流れるように上下することなく一定の勾配を保った水路を作る必要もあったことから、難工事が続き、完成に至るまで実に6年の歳月を費やしました。

現在、緑川ダム近くの山中にひっそりとたたずむ石橋の姿を見ても、当時の大変さはあまり分かりません。しかしながら山あいを11キロメートルもの水路が通っていることを考えると、当時の苦勞がしのばれます。完成から約190年経った今でも約70ヘクタールの田畑を潤し続けている柏川井手と雄亀滝橋は、これからも地域の人々と共に生き続けることでしょう。

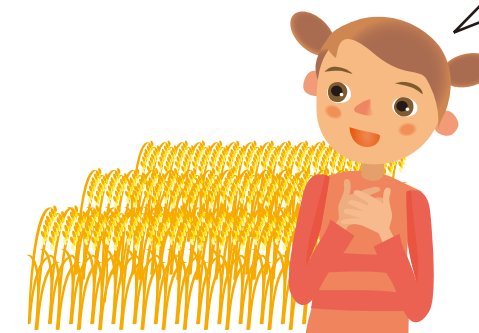


全長11キロメートルにおよぶ井手が今も使われている。



「柏川井手開渠記念碑」
石橋の記念碑は多いが井手としての記念碑は珍しい。
(※開渠…ふたがしてない水路の意)

この豊かな実りは、約190年前の苦勞のおかげなんだね。



力持ちのお坊さんが手伝った?!



石工たちが雄亀滝橋の要石をはめ込む作業をしていたが、石が重くてとても困っていました。すると、光岸寺の得眼和尚という力持ちのお坊さんがやってきて、その要石を軽々とはめ込みました。さらに、ふるまわれた祝い酒を立ったまま三升(約5.4リットル)呑み干して帰っていったといわれています。

お寺には、十二文半(約31センチ)という大きな足袋型と高さ2.2メートルもある棚が残っています。



得眼和尚の足袋型



一般的な足袋(25.5cm)と型を基に作られた得眼和尚の足袋

雄亀滝橋 データ	完 成	1818年(文政元年)	幅	3.63m
	特 徴	水路橋	高 さ	10.70m
	石 工	三五郎(のちの岩永三五郎)	所 在 地	下益城郡美里町石野
	長 さ	14.00m		県指定重要文化財



霊台橋は下益城郡美里町(旧砥用町)にある大きな石橋で、美里町から山都町へと向かう要所に架けられています。単一アーチ橋としては日本最大級の大きさを誇り、国の重要文化財にも指定されています。その堂々とした勇姿と美しさは見事です。現在も橋の上を渡ったり、精緻な石組みの様子を間近で見たりすることができます。

船も役に立たない難所「船津峡」

霊台橋は別名「船津橋」といいます。現在は国道218号が通り、霊台橋のかわりに新しい橋が架けられましたが、昔はこの付近は緑川流域の中でも難所中の難所でした。船津峡という名の険しい峡谷は雨が降るたびに増水し、対岸に渡るための船も役に立たないほどだったといえます。

病人が出たとき、子どもが生まれそうな時にも間に合わない。この峡谷は今から想像するよりもはるかに深い隔りでした。木の橋も架けられましたが増水のために何度も流されてしまいます。何よりも強く、大きな橋が必要とされていました。

この峡谷は現在もわかるように交通の要所でした。このままでは人も通れず、物も運べない、いざという時親の死に目にも会えない。水に負けない強い橋、「石橋」を架けなければならないという地元の人々の気運が高まります。

多くの有名人が名を連ねる

とはいえ、石橋を造るには多くの資金と人出が必要でした。そこで、砥用手永の惣庄屋であった篠原善兵衛が当時石橋造りの職人として名をさせていた「種山石工」集団の棟梁・宇助と宇市兄弟に工事を要請します。善兵衛はその30年前に当時の惣庄屋とともに雄亀滝橋建設にも関わったことがあり、石橋の重要性と架橋の大変さにも熟知していたと思われます。

霊台橋の名の由来

中国の昔の書物『孟子』に出てくる話です。3000年もむかし中国に文王という王様がいました。文王が天気を見るための物見台「霊台」を作る計画を発表すると、日頃から文王をしたっていた国中の人々が手伝いに来て、予定より早く物見台が出来上がったそうです。砥用の船津峡に橋を架ける計画を立てた篠原善兵衛は、この話を知っており、この橋が村人の加勢で予定より早く出来たとき、「霊台」ということばを橋の名につけました。

宇助兄弟はこんな大きな川に石橋を架けたことはないと一度は断ります。しかし善兵衛は自らの死をもって責任を持つと言い、その熱意に負けた彼らはようやく了承。さらに地元の大工棟梁・伴七の協力も得て着工にこぎつけます。1846年(弘化3年)5月のことでした。

架橋工事にあたっては技術者だけでなく役人をはじめ村民など多くの人が協力。工事の延べ人数は実に43,967人という驚異的な数にのぼりました。そして1846年(弘化3年)11月、わずか7ヶ月で人々が熱望してやまなかった石橋「霊台橋」が見事に完成したのです。(竣工検査は1847年春)

橋は守り継ぐ文化遺産

霊台橋は江戸～明治～大正～昭和と、架橋以来多くの人や物を通してきました。昭和40年代まではトラックやバスなどの重量車も走っていました。しかしこの大切な石橋を無くしてはならないと地元の人や専門家などが運動を起こし、隣接して新しい橋を造りました。1966年(昭和41年)に上流側に「昭和の霊台橋」が完成。翌年、国指定重要文化財になります。霊台橋はようやくその仕事を終え、さらに1981年(昭和56年)に車を通すために平になっていた橋の上を、建設当時の丸みのある姿に復元しました。財産である橋を守り継ぎたいという多くの人の思いのおかげで、現在もその堂々とした美しい姿を見ることができます。



橋の安全を守るため、土木の神様、加藤清正公を祀った碑。



現在の橋と構造の違いを見るのもおもしろい。

石橋の構造のひみつ

100年以上も前に造られた石橋の上をトラックやバスなどが通ってもくずれなかったのには構造上の理由があります。

一般的に石橋の中身には、土や小石が詰められていて、それがクッションの役目を果たしています。また、より重い物が通るときには、石橋全体がしなり、上からの力を軽減させているのです。これは柔構造といい、奈良の五重塔にも使われている原理です。近年の高層ビルも、地震対策としてこの柔構造を利用して建設されています。



霊台橋データ

完成 1847年(弘化4年)
特徴 単一石造アーチ
石工 宇助ら総数72人
長さ 89.86m

幅 5.45m
高さ 16.03m
所在地 下益城郡美里町豊富・清水
国指定重要文化財

通潤橋 布田保之助の知恵が田畑を潤した



緑川流域の石橋群の中で、最も有名な石橋のひとつである「通潤橋」。豪快な水しぶきを上げる放水は、観光客の人気を集めています。“放水のある橋”として有名ですが、この石橋は惣庄屋の布田保之助をはじめとする多くの人々の尽力と、驚くほど綿密な計算そして技術力により造られています。

若いときから、その志は高く

布田保之助は矢部手永の惣庄屋だった父を幼い頃に亡くし、苦労を重ねました。10代後半には、おぼろながらも水路橋架橋の構想を持っていたと言われています。

惣庄屋になった保之助は、水の便が悪く思うように農作物が育たず苦しんでいる農民のために、白糸台地に水を送ろうと、通潤橋の架設を計画しました。棟梁として携わった石工は宇市、丈八（橋本勘五郎）、甚平です。水路橋としては雄亀滝橋という手本はありましたが、一番の問題は、橋より高い位置にある白糸台地にどのように水を送るかということでした。



通潤橋の手本となった雄亀滝橋

通潤橋の高度な技術力

保之助は吹上式に注目し、通潤橋を通して白糸台地に水を送る方法を考えました。

また、白糸台地に水を送る際もう一つの課題であった頑丈な通水管についても、石の中央をくりぬいた管をつなぎ合わせ、継ぎ目を特別配合の

通潤橋の水を送る「吹上樋」

通潤橋の通水管は、建造当時から「吹上樋」と呼ばれています。これは、通潤橋の高さが白糸台地より低い位置にあるにも関わらず、取入口と吹上口の高低差を利用することで台地へ勢いよく水が吹き上がることに由来します。

吹上樋は、通潤橋の要となるため、水圧で吹き破れないよう阿蘇の溶結凝灰岩のより堅固なものが用いられています。これらは、事前に実験を行い考案されたものです。

漆喰で漏水を防ぐ方法を考えだしました。

通潤橋は保之助の総指揮のもと宇市ら総数41人の石工と多くの人たちの協力で完成しました。

また、平成28年熊本地震及び平成30年豪雨により通水管の漏水や右岸上流側壁石垣崩落等の被害が発生し、放水を中止しました。保存修理工事の末、令和2年7月に約4年ぶりに放水が再開されました。通潤橋は160年以上経った今でも、地元の多くの人々のために活かされ、また人々に復興への希望を与えてくれる存在となっています。



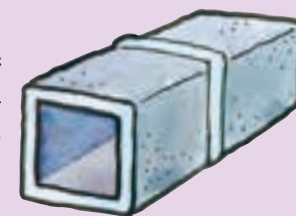
平成28年10月から令和2年5月の修復工事の様子。崩落した93石を含む148石を積み直しています。

石の通水管をつなぐ漆喰のひみつ

石の管をつなぎ合わせて通水管にし、継ぎ目の漏水を防ぐために使われた漆喰は、試行錯誤の経過が見てとれる複雑な配合になっています。

作り方と詰め方

土、石灰、砂、塩、二日ほど煮た松葉汁を特別な配合で白でつきませる。二日二晩程度寝かせて、さらにつきもどしたものを使用する。漆喰を石管のつなぎ合わせ部分に詰めたら、棒で70回ほど突いて密着させる。（「通潤橋仕法書」参考）



上記の材料一つひとつにも白でひいたり、乾燥させたりと細かい作業が必要で、当時とまったく同じものを再現することは難しいようです。

水を送る仕組み



① 笹原川から水を取り入れる。

笹原川から通潤橋に落とし、その勢いで白糸台地へ水を供給している。取入口と吹上口に1.7mの高低差があるので、低いところから高いところへと水が流れる。



※通潤橋の放水は通水管内部に溜まったゴミなどを流し出すために行われています。

② 水は通潤橋の通水管を流れていく。

通潤橋データ

完成 1854年(嘉永7年)
特徴 水路橋、さや石垣
石工 宇市ら総数41人
長さ 約76.0m

幅 約6.3m
高さ 約20.2m
所在地 上益城郡山都町長原・城原
国指定重要文化財



八勢目鑑橋は、旧街道「日向往還」(熊本県から宮崎県延岡市までのルート)に架かる橋です。橋がないときには、「八勢の谷渡り」と言われるほどの難所で、人や馬の命にかかわる危険を伴っていました。そこで、木倉手永(現御船町)の豪商・林田能寛は、自らの財をなげうって架橋に尽力しました。

林田能寛は地元の人々に畏敬と親しみを込めて「ノウカン」と呼ばれています。

一商人の熱意が人々を動かした

八勢目鑑橋が架かるまでは、地元の村人が造った木の橋が架かっていました。しかし、大雨の度に急流八勢川により橋は流され、谷を渡る人馬の事故も多く起こっていました。

御船町で当時酒造業「萬屋」を営んでいた林田能寛は、その状況を見かね、惣庄屋の光永平蔵に石橋の架橋を願い出ました。しぶる平蔵に能寛は、「費用万端はおまかせください。たとえ乞食に成り果てても、この難儀を救わずにはいられません」と私財をすべて投じる覚悟を示しました。平蔵はその言葉に感動し、藩に働きかけ架橋の許可を得ました。

これ以前に能寛は、現在は洪水で失われた「御船川目鑑橋」の架橋やさまざまな公共事業に携わり、寄付集めなどで奔走した実績がありました。そのために地域住民からの人望も厚く、八勢目鑑橋の架橋でも多くの協力が得られました。

わずか4ヶ月のスピード架橋

八勢目鑑橋の一番の特徴は、わずか4ヶ月という工

事期間の短さです。同じ御船町の下鶴橋が完成までに4年、短期間で完成したことで有名な霊台橋でも7ヶ月かかっていることと比較してもいかに短かったかが分かります。

しかしながら、この工事は難所と言われるだけに、そう簡単にはいきませんでした。石工は種山の宇助で、のちの種山石工の祖といわれている林七の孫(嘉八の長男)にあたる人です。宇助は先の御船川目鑑橋の建設にも関わり、その実績から能寛からの信頼も厚かったと思われていますが、その高い技術力と多くの人々の協力があったからこそ、この難所を克服でき、スピード架橋が実現したのです。

八勢目鑑橋がもたらした恩恵

実際に石橋が架かってからは、日向往還を使った人馬、物品の往来が盛んになりました。山都町の生活文化は、熊本と日向の双方の影響を受けるようになり、途中の御船町は物流の要所として栄えることになりました。商人であった林田能寛がどこまで計算していたかは定かではありませんが、八勢目鑑橋は地域の人た

ちにとってお金には替えられない財産となりました。また能寛は、自宅に「文武館」という私学校(御船小学校の前身)を創設し、人材育成にも力を入れました。それらの功績をたたえ、地元の八勢地区では毎年4月に「林田能寛祭」を行ない、いつまでも彼の偉業を伝え続けています。

現在、緑に囲まれた八勢目鑑橋周辺は公園整備され、日向往還の苔むした美しい石畳とともに心癒される散歩スポットとして多くの人が訪れています。



橋の傍に建てられた「八勢目鑑橋之記碑」には、八勢目鑑橋由来が記されています。大意は「能寛は萬の費用を厭はず完成させた…永代に林田が功績を語り継ぎ言い続けるために石文にした。ここを往来せむ人なおざりに見過ごすこと勿れ…」と。



ここまですごい！能寛の固い決意。

林田能寛は八勢目鑑橋架橋を決意したとき、急流と言われる八勢川に自らの身を投げ、「わが命のある限り、この難所を安らかな道筋となし、世の人々を救う。それには大石橋を架け、八勢の激流を見下すほかに道はない」と誓った。そして、橋の絵図を書き上げて惣庄屋の光永平蔵に訴えたとされています。

能寛の並々ならぬ決意と想いが、難工事をわずか4ヶ月で完成させる原動力になったのでしょう。



歴史の道「日向往還-ひゅうがおうかん-」

熊本市から日向・延岡へと至る旧藩時代のルートは日向往還と呼ばれていました。大名が通った参勤交代道とは違い、生活物資を運ぶための庶民の道として、まさに“地道”な役割を果たしていたのです。

日向往還にとって石橋の存在は非常に重要でした。工法が珍しい門前川橋や険しい谷を渡る八勢目鑑橋、聖橋など、今では当時の様子を物語る貴重な歴史遺産です。(令和元年文化庁「歴史の道百選」に選定)



八勢目鑑橋データ

完成 1855年(安政2年)
特徴 大小二連、補強石垣
石工 宇助
長さ 56.00m

幅 4.35m
高さ 10.30m
所在地 上益城郡御船町大字上野
県指定重要文化財



明治6年3月から翌7年夏まで、橋本勘五郎は明治政府から呼ばれて東京で石橋を造りました。その代表は「万世橋」「浅草橋」です。

御船町の国道445号沿いにある下鶴橋は、東京から帰った勘五郎が息子・弥熊（橋本源平）と共に架けました。

東京で多くの見聞をひろめ、技術に磨きをかけた勘五郎と弥熊のセンスが光っている石橋です。

時代は変わり、道も変わる

それまで山都町と熊本市を結ぶ主要道として往来が盛んであった日向還も、明治時代に入ると軍隊の物資輸送には適さなくなったという理由で新しい道の建設が計画されました。

その新しい道に4年の歳月をかけて架けられた橋が下鶴橋です。御船川を渡るその石橋は、当時まだ健在であった橋本勘五郎とその子・弥熊が手がけ、長年培われてきた種山石工の技術が注ぎ込まれています。

技術者そして、芸術家として

石橋を架ける石工たちは、優れた技術者であるばかりか、芸術家（アーティスト）でした。下鶴橋を架けた勘五郎と弥熊は、その代表といってよいでしょう。

改めて下鶴橋を見てみましょう。石垣の継ぎ目は基本的に忠実で少しの狂いもありません。丸い手すりは人に優しさを与えています。さらに、親柱の擬宝珠、その下の蓮の花びらは、逆になってい

ます。このようなデザインを加えて、橋を通る人を和ませてくれています。

さらに橋の両側には、徳利と盃を彫り抜いて、まるで「一緒に楽しみましょう」と語りかけているようです。人が通り、物を渡すだけでなく、橋全体を一つの芸術品として完成させています。優れた人間性豊かなアーティストの仕事です。

東京で多くの仕事をして帰ったばかりの父親・勘五郎から伝授された新しいセンスを弥熊が早速採り入れたことが想像できます。

このような、進取の気性も石工たちは持っていたのです。



丸みを帯びた欄干（手すり）は、石工たちの優しさを感じさせます。

親柱の添石のデザインには「月星眺めて一杯飲もう」という趣向が込められているといわれています。



徳利



杯



月と星

ところで、東京に出て学問が大切なことを痛感した勘五郎は息子・弥熊を明治8年、種山に種山尋常小学校ができるとすぐに入学させます。弥熊は17歳でした。石工でも学問が必要だという父のすすめに弥熊は従って、勉強したということです。

種山石工の円熟期

丸い手すり、おしゃれな飾りをつけた弥熊は、酒を愛し、人を愛した心優しい人でした。

「近くの村の娘さんと結ばれて、そのまま御船町に住んだ」とされています。

また、下鶴橋を架けた後、勘五郎と弥熊親子は福岡県八女市上陽町にある洗玉橋を手がけました。その橋にも同じように装飾を施した欄干や緻密な石積みなどの高度な技術が見てとれます。勘五郎の晩年期である明治時代のこの時期は、種山石工の円熟期と言えるのではないのでしょうか。



福岡県八女市上陽町にも種山石工が架けた石橋が残っています。（洗玉橋）

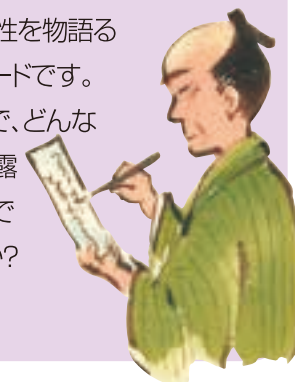


下鶴橋 データ	完成	1886年(明治19年)	幅	5.65m
	特徴	装飾欄干	高さ	14.20m
	石工	橋本勘五郎・弥熊	所在地	上益城郡御船町大字滝尾町指定文化財
	長さ	24.90m		

橋本勘五郎は「歌人」でもありました。

「宮中歌会始め」に招かれたと伝えられています。

明治七年、民間人として初めての栄誉です。明治政府が、彼を特別待遇して接していたことがわかります。勘五郎の豊かな人間性を物語るエピソードです。ところで、どんな歌を披露したのでしょうか？



緑川流域の石橋が観光客を呼ぶ。

緑川流域の石橋群には、さまざまな特徴があり、知れば知るほど、石橋が面白くなってきたのではないのでしょうか。そして、その魅力に惹かれて多くの観光客が訪れています。自然に囲まれた散策スポットとして、歴史文化の学習の場として、石橋の姿の美しさに触れるために…など、その理由は十人十色でしょう。

今後は、地域の観光施設や、受け入れる地元の人たちとの交流も生まれてくるはず。ここからは、石橋と観光とはどういうことなのかを考えてみましょう。

観光という新しい役割を担う。

これまで石橋は、主に人や物資を渡すために架けられた「道」としての役割を担ってきました。

しかし、100年以上もの年月が経った現在では、歴史的、文化的要素を持った地域資源としての価値が高まっています。観光客はその価値に魅せられて訪れます。

今後、石橋の魅力を多くの人に知ってもらうために、石橋そのものの見た目だけでなく、そこに携わってきた人々の物語やその構造・機能など幅広い情報発信が必要になってきます。緑川流域の石橋は、新たな交流を生み出す貴重な観光資源として期待されているのです。



豪快な放水が特徴の通潤橋(山都町)は、観光資源の代表格として見学旅行の定番となっています。道の駅や通潤橋史料館も隣接しているので、これからも緑川流域の石橋観光の拠点の一つとして期待されています。

観光のキーワードは歴史・文化

近年の動向として、歴史や文化などに興味がある人は年齢が高くなるにつれ多くなっているという調査結果が出ています。一般的に観光誘致のターゲットとして挙げられるシニア世代が文化・歴史の宝庫である石橋群へ興味を持つ可能性が高いとも言えます。

石橋の魅力をもっと情報発信しなければいけないね。



大窪橋(美里町)は桜の時期をはじめ、四季折々に周囲と溶け込んだ風景が美しい。花見客やカメラマンなどが多く訪れています。

地元の人たちの意識も必要

石橋が残っている地域で暮らす人々にとって、ほとんどの人が生まれる前から架けられている石橋は、通潤橋や霊台橋など、国指定重要文化財に登録され、すでに観光客が訪れている石橋を除き、日常の風景の一部になっています。

しかし、近年歴史遺産として注目されている緑川流域の石橋群は、普段の生活に溶け込んでいる石橋を含め、多くの人を惹き付ける魅力と可能性を持っています。そのことを地元の人たちも意識し、各地から訪れる観光客を温かく迎え入れていかなければなりません。逆に観光客も地元の人たちとの触れ合いを楽しみにしている場合が多いのです。

石橋観光のプラス!

石橋は季節で楽しみが変わる。

緑川流域の豊かな自然に囲まれた場所にある石橋群は、四季折々にその表情が変化します。桜の花びらが舞ったり、のどかな田植えの光景が見られたり、祭騒音が聞こえてきたり…と、その時々によって異なる風景に惹かれます。

二俣橋(美里町)ではイチョウの時期に黄色のじゅうたんが広がり、見事な景観を楽しむことができます。



緑川流域の石橋群の魅力

- ①石橋の姿そのものが魅力的である。
- ②周囲と溶け込んだ風景が美しい。
- ③石橋にまつわる物語が数多くある。
- ④個性ある石橋が集まっている。
- ⑤国・県・町の重要文化財として指定されているものも多く、歴史遺産としての価値が非常に高い。

など、さまざま。



石橋観光のプラス!

点ではなく線を辿る観光へ。

石橋一つひとつにももちろん魅力はありますが、石橋が架かる街道(日向往還など)を歩き、遠い道のりを往来していた昔の人々が目にした風景に思いをめぐらすのも趣があります。また、石橋だけでなく、種山石工のふるさと(石匠館など)へ行き、時代の流れを学ぶと石橋の楽しみ方にも幅が広がります。

山都町(旧蘇陽町)の馬見原は街道の宿場町として栄えていました。日向往還を辿るならばここまで迎い着きたいところです。



石橋文化とおもてなしの心

石橋文化とおもてなしの心

それでは、観光客を受け入れる人たちはどのようなことを行なっていかなければならないのでしょうか。

一つは、ふるさとである緑川流域の石橋文化が観光資源であると認識すること。次に“おもてなし”という言葉がありますが、気持ち良く観光を楽しんでもらうように接することです。

認識は誇りになり、そして魅力になります。

先人の知恵や苦勞が注ぎ込まれている石橋はふるさとの文化の象徴です。そこに住んでいる人たちがそのことを認識すると、ふるさとを誇りに思うようになります。そうするとその地域は、自然とふるさとづくりが行なわれるようになり、観光客から見ると魅力的に映ります。

観光を意識して行なうのではなく、ふるさとの文化を知り、学び、受け継ぐことを意識することが大切です。

魅力的な素材はすぐ近くにあります。

よくこんな話を耳にします。観光客が地元の人に「この辺で何か見るところはありませんか？」と尋ねると地元の人には「なんもなかなか」と答えるそうです。本当に何もないのではなく、謙遜してそう答えたり、魅力的な場所があるのに気づいていなかったりする場合があります。しかし、その答えを聞いた人はがっかりして、再び訪れることはないでしょう。

「おもてなし」とは

この言葉の意味は、本来「持て成す」(=ご馳走する)という意味で使われてきました。お客を迎えるにあたって、食事を振舞うということが、一番重要な接待だったのです。現在は広い意味での気配り、心配りとして使われています。英語ではHospitality(ホスピタリティ)と言います。

石橋文化のポイント

このような物語を知っておくことで、観光客との会話ができるようになります。家族や仲間同士で話してみるのも良いでしょう。

八勢の石橋のお陰で矢部郷が栄えました。

石橋は暮らしを支え、向上させてきました。今も、私達の暮らしを支え続けています。だから、私達の仲間、故郷の大切な一員なのです。



通潤橋の石の数は全部で約6,000個もあります。

親子一緒になって石橋の歴史や大切さ、有難さを語り続けていきましょう。



一方、足元に架かる石橋を教えるだけで、観光客は驚くかもしれません。「この橋は100年以上前に種山石工という…今でもこうして現役です。この先にもありますよ」などの話は、観光客にとっては魅力的な「石橋物語」となります。素材はあなたのすぐ近くにあるのです。

おもてなしの心は些細なところに

おもてなしは何もかしこまってしまうことはありません。ほんの些細なことからすぐにできることがたくさんあります。

例えば、

① 元気に挨拶をしましょう。

元気の良い挨拶はとても気持ちの良いものです。遠くから訪れる人たちに「こんにちは」とまずは挨拶しましょう。挨拶は人を区別せずに普段から行なうことで自然とできるようになります。



③ ちょっとした心配りを

親切の押し付けはおもてなしではありません。道や場所を教えたり、記念写真を撮ってあげたり、困ってそうな人がいたら声をかけてみましょう。ちょっとした心配りをすることで十分でしょう。



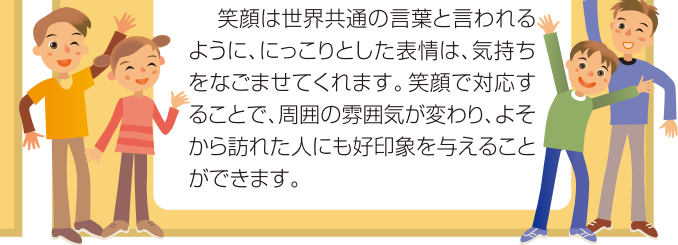
② ふるさとをきれいにしましょう。

美しい石橋のそばに空き缶が転がっているのは、せっかくの景観も台無しです。ごみを拾ったり、荒れたあぜ道などに花を植えたりすることで景観だけでなく心もきれいになります。



④ やっぱり笑顔が一番

笑顔は世界共通の言葉と言われるように、にっこりとした表情は、気持ちをなごませてくれます。笑顔で対応することで、周囲の雰囲気が変わり、よそから訪れた人にも好印象を与えることができます。



人の輪がふるさとをつくります。

石橋文化を知り、おもてなしの心を身につけていくときに、自分ひとりだけではなく、周囲で仲間をつくっていくと心強いでしょう。そこでできる輪は次第に広がり、ふるさとづくりへとつながります。その輪が受け継がれていくことで、緑川流域の石橋文化を中心とした地域全体の魅力が高まり、その魅力に触れようと多くの人々が訪れるようになります。まずは身近なところから行動してみましょう。



石橋観光モデルコース



実際に石橋めぐりに
出かけよう!

27~28ページのマップを御参照ください

緑川流域の石橋観光モデルコースをご紹介します。個性ある10の石橋をめぐり、さまざまな物語を学ぶ石橋観光の中心となるコースです。自分でプランを立てて、日帰りあるいは宿泊で、一度でなく、二度、三度訪れて、石橋の魅力に触れてみましょう。そして、観光客などの多くの人に紹介しましょう。

緑川流域石橋観光モデルコースの例

福岡 車で移動時間の目安



かみましき阿蘇観光サザンルート

緑川流域の石橋群を見に行くためには、「かみましき阿蘇観光サザンルート」を利用すると便利です。渋滞が少なく、きれいな道が続き、上益城地域の観光スポットを回遊する主要道としての役割を担っています。サザンルートを知ることによって、より多くの石橋や観光スポットを楽しむことができます。

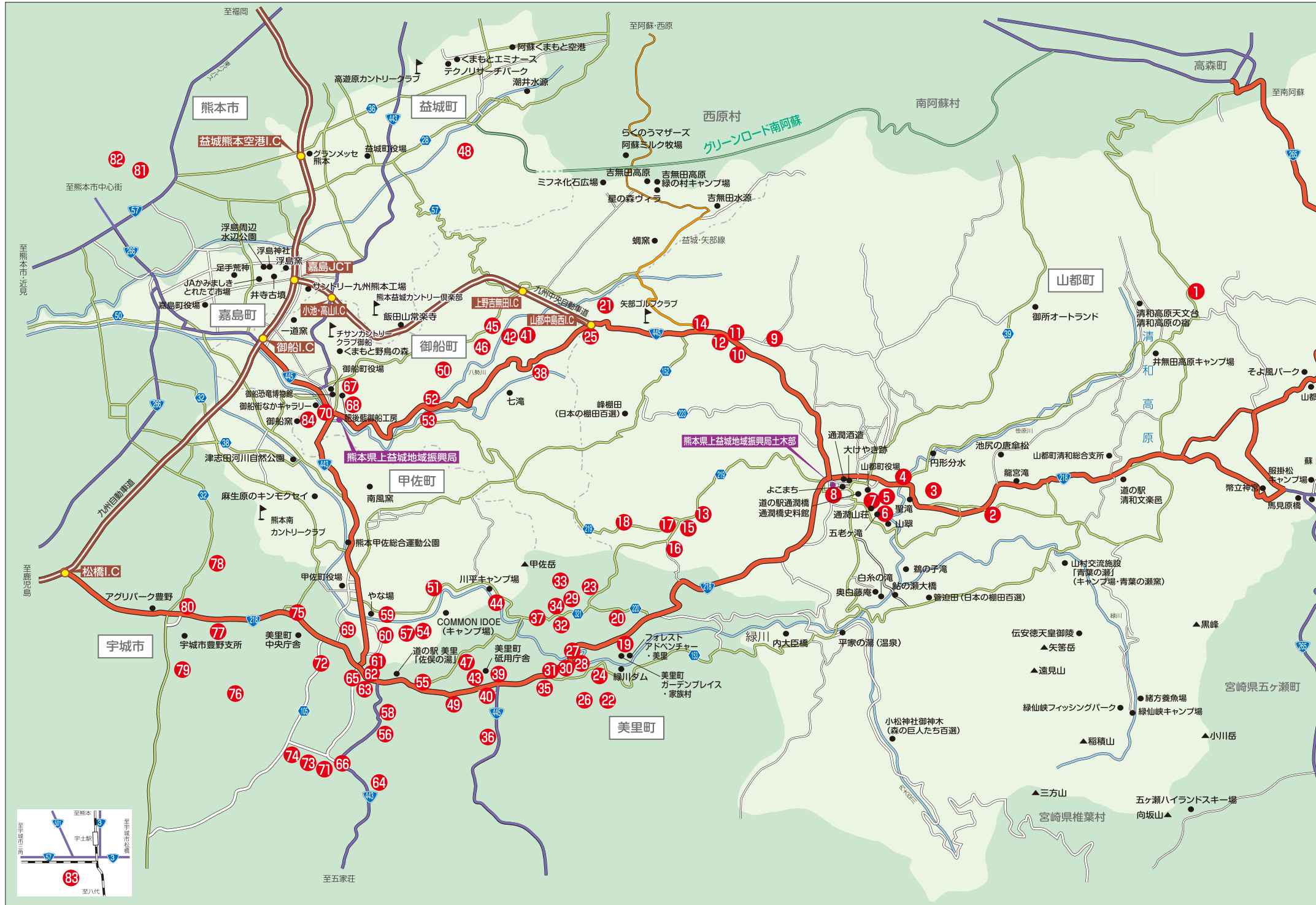


アクセスの良さがポイント!

サザンルートを使えば、御船インター・松橋インターから南阿蘇まで約90分。サザンルート沿いは、通潤橋に代表される有名な石橋や清和文楽など歴史文化の宝庫。上益城ならではの特産品や、おいしいものがいっぱいあります。御船町の門前川橋まで最短で10分、遠い通潤橋までであっても45分あれば辿り着くことができます。

緑川流域の

石橋



■ 山都の石橋

- 1 舞鶴目鑑橋(郷野原橋)
- 2 貴原橋
- 3 男成橋
- 4 聖橋
- 5 木鷲野橋
- 6 城原岩立橋
- 7 通潤橋
- 8 浜町橋
- 9 鹿生野橋
- 10 夕尺橋(平成26年撤去)
- 11 金内橋

- 12 立野橋
- 13 瀬峯橋
- 14 滑川橋
- 15 とどろ橋
- 16 柚木橋
- 17 石堂橋
- 18 松尾橋
- 21 山中橋
- 25 瀬戸橋

■ 美里の石橋

- 19 鍵ノ戸下の橋
- 20 下用米橋
- 22 雄亀滝橋
- 23 桑野橋(境ノ谷橋)
- 24 梶橋
- 26 志道原橋
- 27 豊台橋
- 28 鍵ノ戸橋
- 29 白岩橋
- 30 岩清水橋
- 31 ゆきその橋

- 32 樋渡橋
- 33 中岳橋
- 34 井竿橋(平成28年流失)
- 35 内山橋
- 36 小夏橋
- 37 西ノ鶴橋
- 38 上小夏橋
- 40 耳取橋
- 43 舞鹿野田橋
- 47 告乗橋
- 49 大窪橋

- 55 馬門橋
- 56 機織橋
- 58 小岩野橋
- 61 二俣福良渡
- 62 二俣川目鑑橋
- 63 年苮橋
- 64 椿橋
- 65 小筵橋
- 66 妙見橋
- 69 萱野橋
- 71 木早川内橋

- 72 風呂橋
- 73 古米橋
- 74 小市野橋
- 75 堅志田橋

■ 宇土・宇城の石橋

- 76 丸林橋
- 77 薩摩渡
- 78 安見橋(下鶴橋)
- 79 三由橋
- 80 山崎橋
- 83 船場橋

■ 熊本・益城の石橋

- 48 柳水橋
- 81 太鼓橋
- 82 大井手橋

■ 御船・甲佐の石橋

- 38 吹野橋
- 41 八勢水路橋
- 42 八勢目鑑橋
- 44 広瀬旧道目鑑橋
- 45 茶屋本橋
- 46 長迫橋(毛刈田橋)
- 50 堀切橋
- 51 御手洗橋
- 52 下鶴橋
- 53 下梅木橋
- 54 尾北目鑑橋

- 57 堂迫目鑑橋
- 59 やな樋門橋
- 60 大祇目鑑橋
- 67 門前川橋
- 68 中道橋
- 70 下津留橋
- 84 御船川目鑑橋
(昭和63年流失)



石橋紀行

※石橋紀行は平成16年度に執筆された記事をもとに掲載しています。

橋はどこですか」赤いバイ



安見橋

静かな川面のアーチ 安見橋(下鶴橋)



所在/宇城市豊野町山崎

は静かだ。アーチの姿がそ

豊野地方は違った。太陽を遮る山はない。川面は静かだ。アーチの姿がそ

九州中央山地から流



船場橋

城下町・宇土の雅 船場橋

橋は城下町の雰囲気

城下町宇土にふさわしいおしゃれな橋。文久年間とも慶応年間の架設ともされているが、矢部地方の石橋とくらべてゲツと若い。おまけに、この地方特産の堅いキメ細かい馬門石で造られているので、うっすら赤味を帯びた石の肌のでやかさが加わっている。



所在/宇土市船場町

その日、浴衣姿の娘さんが三・三・五橋を渡る光景に出会った。城下町の風情をひとと感じたことだった。



やな樋門橋



やな場

「甲佐の鮎は旨い」「いや、もともとは緑川の鮎なのだ」と鮎談義はいつも故郷の自慢話になるが、鮎

その近くの樋門が「やな樋門橋」と呼ばれているが、元を正せば清正が緑川改修に際して農業用水路として開いた井手の水量調節用の樋門である。地元の古老は「清正公さんが作らしたけん、もうだいぶ経つとるバイ」。架設の年もさだかではないほど古い

遙かなる薩摩への道 薩摩渡



所在/上益城郡甲佐町大字豊内

遙か薩摩の国に通じる入口だった。この先の松橋には、熊本へ八代へ水俣の薩摩街道が通っている。この手前、この川を渡らないと、どこにもいけない。橋の横の「猿田彦」の大きな碑が昔からの交通の要だったことを物語っている。



所在/宇城市豊野町糸石

広い空の下に広がる田畑、ゆったり流れる川を前にしていると遙か南国を望む大らかな気分になっ

甲佐町

宇城市 宇土市

鮎料理の「やな場」を守る

やな樋門橋

多くの観光客で賑わう。

川瀬の音を耳にし、目の前で跳ねる鮎を食べる風流はこたえられない。それにしても、この樋門のおかげと知っている人はいるのだろうか。

国道218号が松橋に突き当たる少し手前、静かに流れる浜戸川に架かっている。雄亀滝とか八勢などの峡谷の急流を訪ねてきたので、浜戸川という名に、ああ「海岸が近いのだなあ」と思う。



薩摩渡

山都町 そのII

「わーっ、虹が生まれた！」

通潤橋

「通潤橋」の前に来た。幾

度やつてきても見る度に感動が湧く。今日も端正な姿で橋は正座しているが、その存在感にはいつも唸る。「戦争中はアメリカの空襲から橋を守るために、橋の上に竹をたくさん並べて空から見えないようにカモフラージュしました」。案内人の飯星時春さんの説明に年配のツアー客だけが頷いていた。戦後生



呼ばれ東京の万世橋、浅草橋を架けた。

かつて、三十年ほど前に東陽村の勘五郎の生家を訪ねたとき子孫の橋本脩成氏から「勘五郎の東京土産は世界地図でした」と聞いたことがある。「雷おこし」ではない。文化性高い人だった。

× ×

通潤橋の前には、「八朔祭」で披露された「大造り物」が二基、三基展示されている。自然素材を基にした巨大な、それでいて緻密、精緻な造り物を町内力を合わせて造りあげる。矢部の人たちには、通潤橋を生み出した布田保之助の「通潤魂」と呼ぶ

まれの人でも、七十歳をこえるようになってきた。B 29、国防色の言葉も死語になった。

お米の有難さ、一粒のお米の尊さが判らねば、通潤橋を渡る水が、荒地の白糸台地に命を与え、豊かな実りをもたらしたことは、とても理解できないだろう。

律儀な飯星さんは、五十年以上も前に、村人たちが通潤橋に託した思いを、戦後生まれの人に少しでも解ってもらおうと、いつも詳細に話し続ける。放水が始まると二斉に「ワアツ」と歓声上がる。「虹が出来た、虹が生まれた。」

こんなに沢山：「子どもたちはもう興奮状態だ。子どもがこんなに感動するなんて、北九州からやってきた甲斐がありました」お父さんも嬉しそうだ。

「虹」が生まれるまでの血と汗の物語は既に知られつくされている——目の前の通潤橋の右手、南の方の白糸地区は地形の関係で水に恵まれなかった。田が作れない、だからお米

結ぶ重要な役目だった。なにしろ霊台橋よりも十五年も古く、矢部では最古参の石橋だ(天保3(1832)年)。昭和12年、新しく横にコンクリート橋の工事が進められていた。

たまたま通りかかった地元郷土史家の井上清一氏は驚いた。新橋の根元に聖橋の石が使われていた。聖橋は取り壊されよう

のプールの内部が区切られ、うまく水を配分する装置。九州には大分県竹田市とこしかなない。水争いのないように、上手に水とおつきあいするシステムだ。水を大切にすなわち部郷ならではの知恵だ。

「虹」が架かっている。近くに名瀑・聖滝があるのでこの名がついた。平行してコンクリートの橋が国道には架けられているので今は大役を終えているが、かつては馬見原を通り日向や高千穂を



通潤橋

「放水目当ての人が多くなりました」役場の本田さんは苦笑する。放水は観光用ではない。石管に詰まったゴミを放水で放出する処理だ。そこまで考えられて橋は作られた。

昔は一年に一度、八朔の時にだけ放水があった。石工・丈八はその後、熊本藩から名字帯刀を許され橋本勘五郎と改めた。明治6年政府から東京に

この笹原川の地点から通潤橋の水が井手を通って運ばれて行く。



所在/上益城郡山都町長原・城原



所在/上益城郡山都町野尻

円形分水

昭和31年に造られた分水装置。円形に集めた水を角度で割り、水田面積に応じて配分している。その割合は通潤地区:7、笹原・野尻地区:3。



山都町 その1

八勢目鑑橋を渡り、難所の赤子谷を通り、日向往還は山都町に入る。往還筋を辿るとき滑川橋、金内橋、立野橋を通り、最後に浜町の入口の浜町橋ということになる。本稿は往還がテーマではないので詳細は略すが、旧街道は、川を可能な限り避けている。



金内橋

やむを得ず渡るとき最も川幅の狭い場所を通る、これが鉄則である。だから石橋を探し訪ねるときはそんな場所をカシで探したものだ。今は観光客が訪れるので、○○橋と方向の標識が整備されているので大助かりだ。快適に国道を通り、簡単にお目当ての石橋に行き着くことができる。

× × ×
 だけど、本来、一本の道で続く道と橋だが、全く往還とは無関係に突然に石橋に行き当たる。従ってつながりが判らないまま、単に石橋だけを見てしまう。

大小二つのアーチの秘密は 金内橋と立野橋

まずは「金内橋」、よく見ると大小二つのアーチ、大きいアーチは御船川が流れている。小さいアーチの下は中島福良井手の水路になっている。どの田んぼに行くのだろう、好奇心で水の流れを追って歩いてみた。国道の下をくぐった

国道218号、滑川橋の上に立っているのに、「滑川橋ってどこ？」とあたりを見回す。そんなことも良くある話だ。
 × × ×
 金内橋、立野橋、旧道や川とは無関係に矢継ぎ早に石橋が出現してくる。

水路はなんと「立野橋」に続いている。さらに、下の田畑の方に水が流れている。
 × × ×
 城壁のような石組みの立野橋は水を渡している。立野橋は水と人と両方を渡しているのだ。だから頑丈にできている。
 × × ×
 今は農作業の人しか通らないが、かつては日向往還として旅人がこの橋を渡った。
 × × ×
 この道に添って行くと矢部の入口に着くのだろう。元に戻って金内橋に。
 金内橋は旧金内村の中心にあり、その周辺は小さな宿場であった。橋の横には鎮守の森の金内神社、日向往還巡りの人はよくこの森で弁当を広げている。



所在/上益城郡山都町金内



立野橋

石橋紀行

※石橋紀行は平成16年度に執筆された記事をもとに掲載しています。



西山家の石垣

石匠館の上塚尚孝館長から教えて頂いた。石材は裏山の石切場で採った。「石工のウーさん(宇助)、ジョーさん(丈八・のちの橋本勘五郎)は作業中、近くの西山さん宅に滞在した。

せきしよかん うえつかなおたか
 石匠館の上塚尚孝館長

今は近所の人の生活道路
夕尺橋
 夕尺橋へ向かう途中「夕尺橋」の標識。ロマンチック

後で『お世話になったけん』とお礼を込めて西山さん宅の石垣を築いた」。
 × × ×
 すぐ近く、立野橋の前の西山家は三方に60mも続く高い石垣がめぐらされていた。素晴らしい出来栄に目を見張る。
 × × ×
 今、金内橋は補強のためコンクリートで塗られている。きつと西山家の石垣のように緻密に組まれているのだろうか。
 × × ×
 金内橋から浜町橋まで車で10分もかからなかった。街道を辿るとたつぷり2時間はかかるものを。



夕尺橋

な名に心動かされた、寄り道してみよう。金内橋から近かった。可憐な名の通りに小さくて可愛い石組み、女性のようなやさしいたたずまいで野の中に架かっていた。この地区が「遊雀」という名前だったことから転じて「夕尺」となった。川の名前はなんというのだろうか。かつての日向往還だったと聞いたが、今は農作業へ行く近所の人しか利用していないのだから。
 (平成26年撤去)

バス、トラックが通る 浜町橋

ここも、いきなり橋の上に立つので実感はない。矢部の中心地・浜町の西の部に当たる、重要な橋だ。現役だ。路線バスが町の中心に吸い込まれて行く。西南戦争の末期、敗色濃い西郷軍は矢部に集結し陣容を整えた。その家



所在/上益城郡山都町金内

橋への道の土の感触がとっても優しかった。こんな珠玉のような橋もあることを知った。



所在/上益城郡山都町下馬尾

も残っている。その時は浜町橋一帯は随分慌ただしかったことだろう。
 × × ×
 川原に下りてみる。橋の上では気づかなかったが行き交う車の音が激しく降ってくる。補強されたコンクリートの橋桁などが目についた。



浜町橋

船津峡を一気に跨ぐ

霊台橋

大窪橋を見たあと、国道218号を山都町(旧矢部町)に向かう。上りの道が続く、最後の坂を登



りつめ下りにかかる頃、左下に大きな大きな石のアーチが見えてくる。「霊台橋」だ。橋の近くに行く前に、できれば手前の見晴し台に車を止めて、目の下、船津峡を大きく跨ぐ石橋の右の崖に目をや

石橋紀行

※石橋紀行は平成16年度に執筆された記事をもとに掲載しています。

いたから。その木組みを取り外す光景を作家今西祐行氏は「肥後の石工」の中でこう述べている。「いよいよ木組みの取り外し、一番重みのかかった柱を後にして二本一本材木が外され急流の中に水しぶきをあげて落とされていった。一瞬五百尺の石橋がゴーツと地震の地鳴りのような音を立て、かすかな石のこなけむりがたつた」。

支えられ、山の精気と川の霊気を吸って生きている。ツアー客は足早に去って行った。川原に下りて下からゆつくり霊台橋を見上げて欲しい。輪石の緻密な石組みがハッキリと分かる。

雄亀滝橋

霊台橋から山都町(旧矢部町)へ向かう国道218号の途中、「雄亀滝橋」の標識、斜め右へ坂道を下りる。



つて欲しい。左岸は切り立った崖だが、右手、南の方面は崖が低くなりゆるやかな河原状になっている。兩岸の岩盤が強くないとアーチの石橋を支えきれない。「うーん」自分が石工の棟梁・宇助になつたようについ呟いた。細かく橋の造りを見ると、袖石垣(写真)と呼ばれる長い石垣が延びて、その先端からアーチが架けられている。「難工事だつたらうな」素人目にもその難作業ぶりが想像できる。



緑川ダムとダム湖

クが行き来していた。「いやー、緊張しました。スピードは落とせない、でも速度をあげると橋が痛む……」運転手さん泣かせだった。戦後の日本復興の材木を渡し続けた霊台橋は、今静かに隠居の安らぎの中にある。日本最大級の単アーチの石橋。グループが橋の上

から下の川面を覗いている。川面まで17〜18mはある。ピルの6階建てに匹敵する高さだ。石橋づくりは、まず土台の木組みが重要だ。大工棟梁・伴七以下44名が作業に当たった。石工は72名。橋の横の碑に大工のことが詳しく記されているのは伴七の日記が残されている

「いま石橋と平行して並ぶ鉄の橋が昭和41年にできるまでは、石橋の上を矢部の山奥から切り出した材木を満載したトラッ

ひとつ頃は難読文字だったが今は「オケダケ」と殆どの人が読める。石橋ファーンには必見の橋になった。通潤橋のモデルになった水を渡す橋だ。大型の車は通れない。山奥の小さい橋だが、使命は大きい。水を「当惑谷」と呼ばれた谷を越えて渡している。下り坂の道を進む。すぐ横を井手が流れている。井手に添って歩いて行くと橋に行き着く。

途中、石の碑文が建っている。道の端を流れる「柏川(がわ)井手」の記念碑。当時の惣庄屋・三隅丈八が11kmに及ぶ水路とそれを渡す雄亀滝橋を完成した記録が綴られている。「完成の通水式には、若い布田保之助(17歳)の姿もあつたといひます。その時から、通潤橋をかけるすね」と案内人は語ってくれた。多くの人が注目する「さきかけ」の石橋だつたらう。



所在/下益城郡美里町豊富・清水

美里町 その1

そっくりの兄弟橋

二俣橋

国道218号と443号は美里町の中心部で十字に交わっている。その辺りは、九州中央山地に源を発した津留川と、霊場



スケッチする女性たち

釈迦院から流れる釈迦院川の合流点になっている。

美しい二つの川が交わる一帯に石橋が二つ。世に「兄弟橋」とも、「二俣橋」とも呼ばれる二つの、そっくりの橋がL字型に交わっていた。

「石橋のロータリー（交差点）です」車を駐めて眺めていた二人連れが



二俣橋

話し合っていた。福岡ナンバー。「福岡には石橋が少ないのに、どうしてこの地方は多いんです。ようね」素朴な疑問を話し合っ



ている。

川原には親子連れ。スケッチする女性の姿。美しい流れに誘われるように川原へ下りてみる。

目線がグツと低くなった。石橋のアーチが真上にぐうーと覆いかぶさって来る。もう一つは向こうに伸びやかな弧を描いて見える。透き通った水の中に入エがお腹を光らせ泳いでいる。橋の上から見る景色とは全く異なった空間に身を置いた。

石橋のお腹を見上げる。アーチの石組みが二つひと



所在/下益城郡美里町小筵 下益城郡美里町今・佐

つハッキリ見える。木組みを作って、その上に石を重ねて——そんな簡単な作業ではない。ミリの違いのないように、削り、重なる。生命あるもののように繋ぎ合わせていく手作業の集積、……その仕事の重みを頭上を感じる。首が痛くなった。眺め

仰ぐだけでも大変、重機のないその昔の石工や大工さんの「匠の技と心」を仰ぎ拝した思いだった。二俣橋から釈迦院川上流を見ると大正13年築の石橋・年祢橋が、四つの大小の弧

を描く。その手前に国道

218号の鉄の橋。大小合わせて五つの橋を味わった。川原で父と息子は、まだ遊んでいる。先を急ぐ父に子どもが、「まだ遊んでいたい」とだだをこねている。「今度はお弁当を持って来ようね」。

川原の砂と流れと遊べる。緑川水系の中でも貴重な「景」が味わえる。子どもは納得したようだ。

釈迦院詣での道だった

小筵橋

この辺り、西の高野山と崇められている釈迦院の麓に当る。里人は釈迦院詣での篤い信念の中に暮らしている。

幾つかの釈迦院への道が、いつの間にかできていった。

小筵橋



道ができ、そして川を渡たるための橋が架けられていった。

「小筵橋もそのつ。二俣五橋の近くにある小筵橋。日本の「三千三百三十三段」の石段への道の入口というように、石段のモニュメントが向かいに建つ。

かつては熊本〜釈迦院、五家荘への道だった。今は水枯れの川の上に静かに身を横たえている。多くの人が渡っている昔の光景を思い浮かべながら橋を30分ほど眺めていたが誰も人は通らなかつた。



馬門橋

ほの暗い谷間に

馬門橋

国道218号、「佐俣の

湯」の先に「馬門橋」。あたりは木々に深く囲まれていて森の中のように暗い。いつの間にか橋の上に出た。橋の全景は全く見えない。さつき遊んだ二俣橋の上流にあたる津留川は、ここではぐつと険しい表情を見せている。

かつて熊本〜砥用から馬見原を結ぶ主要な道だった。石畳が残っている。

ゆつくり橋を渡る。自然と、ゆつくりと渡っている自分に気づいた。橋のもとに古いお地蔵さんが……。足場を探して川岸に来た。改めてアーチを落ち着いて見た。

乱積みに近い石組み、雑な石組みの隙間に小さい石が挟み込んである。橋が二段になっていることに気付く。明らかに、改修され補修された跡だ。

最初は橋の中央部は凹型になっていた。後に、(文献はないのだが)今のようになり手が加わった。

それでも形の不自然さはない。向こう岸に釣り人がどこから下りたのだろうか。ヤマメ釣りに違いない。

そのまま砥用の方へ坂を上って進む。畑に出た。空が眩しかった。一本の石の記念碑。

「文政十年……備前児島郡……石工・茂吉……」と読めた。備前石工が手がけた珍しい石橋である。そして、大きく「車一切通

遍可ら須」。今から訪ねる大窪橋や霊台橋よりも二十年〜二十二年も早くできている。このまま絶景の中にいて欲しい。

優しく美しく

「大窪橋」はのどかな風景の中にたたずむ。馬門橋と同じく津留川に架かっている。

平坦な畑に囲まれ、小ぶりだが上反りが大きく弧を描いているので国道218号沿いからも印象的な姿が見える。

川の流れに備えて、上部の丸みを大きくしている。同じ津留川でも、少し川の表情が変わると橋の表情までこんなにも変わるものだ……。農家の人が、



所在/下益城郡美里町大窪

収穫した野菜を天秤棒で両端に担いで、行き来した光景が浮かぶ。かつて大窪の集落は橋の南側山裾にあった。橋ができたら日当りのよい向こう岸の北側に移った。橋のお陰で農産物を運ぶのが楽になった。橋は農民と共に生きてきた。



大窪橋

※石橋紀行は平成16年度に執筆された記事をもとに掲載しています。

石橋紀行

御船町

どっか中国風の感じ

門前川橋

緑川水系の石橋巡りの旅は緑川と御船川の合流点・御船町から。

町の入口から左へ大きくカーブした県道221号、日向往還沿いに木倉小学校、その手前に「門前川橋」が顔を出す。



門前川橋

後のこと(昭和58年)だが、今、横に架けられている新しい橋ができて、「石橋は無用の長物」になった。取り壊しの話もあったそうだが、「私財を投げ打って作ってくれたノウカンさんに申し訳ない、なんとか残して」との熱い心で保存された。

ノウカンさん、地元の人がこう呼ぶ林田能寛、御船町の豪商である。それまでにも御船川目鑑橋にも私財を投じた。「地域



八勢目鑑橋

橋の名前からしてお寺があつたに違いない、と思つて尋ねてみた。少し離れた場所に古刹永寿寺が建つていた。歴史ある永寿寺の参道に当る石橋だつた。

二百年ほど昔に架けられた。中国風と感じた理由の一つは、アーチの石の並びにつつづ楔が入っていることと、中央部が円く膨らんでいるところが、エキゾチックな印象を強めている。横のシユロの木とカンナの花とよくつりあつていた。近くの人がこの橋を大切にしていることが感じられ、温かい気持ちで、旅のスタートができた。

の人たちのために」「たとえ乞食になつても……」彼の故郷愛が実を結んだ。「僅か四ヶ月で完成とは、とても信じられません」訪れた人は驚く。それほどの熱意の結果が短期間で完成させた。

「この橋のお陰で、矢部の火事が少なくなりました」。郷土史家・林駿一さんはこの地を訪れる人にもいつもこゝろ切り出す。「?」みんなポカーンとしている。



所在／上益城郡御船町大字木倉

日向往還の難所に架かる

八勢目鑑橋

日向往還を通り、軍見坂を上り、八勢の難所を目指す。

追分石のある茶屋元には、幕末の勤王志士・宮部鼎蔵の生家跡が。そこから谷そこへ降りていく日向往還に、「八勢目鑑橋」が大きくどしりと架かつていた。途中、門前川橋からこままでの道は趣き深いインドロだった。

凱旋門というバス停横には日露戦争の凱旋兵士

橋から続いていく、日向往還の石畳の道は山都町に続く。

八勢目鑑橋のおかげで熊本(市)との交通が便利になり活発になった。熊本へ山の物資を納め、帰りは「瓦」を買って帰る。ワラ屋根の矢部のまちに瓦屋根が増えていった。

それで「火事が減つた」。橋の西端に石碑が建っている。石橋完成の安政2年の時のものだ。



所在／上益城郡御船町大字上野



八勢目鑑橋

を迎えた記念の石柱が建ち、道の端の水路には豊かな水が流れている。元禄嘉永時代に完成した井手(水路)で「元禄嘉永井手」と呼ばれている。

八勢目鑑橋は、そんな素晴らしい環境の中に静かに横たわっている。深くえぐられた八勢谷を大きく跨いでいる。橋の下に立つて、もう一度ゆつくりと全体を眺めてみる。豊かな水量をたたえる八

親しみ深い

下鶴橋

県道221号を御船町へ戻り、国道445号を山都町へ。「下鶴橋」が国道と並んでいる。

横の、昔からの小さなお店に寄る。

「石工の弥熊さんは『御船の酒は旨か!その記念に』とトックリと盃を親柱の添石に彫り抜きなすつた。焼き物の丸い一升瓶バ置いてチビチビやりながら……」

以前、お店のお婆ちゃんから聞いていた話を思い出す。

弥熊は下鶴橋を架けたときに知り合った近くの玉虫地区の娘さんと結婚したという。玉虫と言



下鶴橋

えば、源平合戦の時に那須与二が射た扇の的をもつたのが玉虫の姫。御船出身の美しい女官で、のちに彼女はふるさとへ帰り、平家一門を祀る玉虫寺を建てた。

こうして調べると、さまざまにつながっていく歴史が益々面白くなる。



所在／上益城郡御船町大字滝尾

石橋に感謝

ふるさとに、天の恵み(阿蘇の熔結凝灰岩ようけつきようかいがん)があつた。優れた技術集団(肥後の石工)がいた。村の、豊かな暮らしを願う惣庄屋そうじやうやがいた。皆が力を合わせ、堅固な石の橋を架けた。まだ見ぬ、子や孫の明日を思つて――

緑川流域一帯の、谷間、谷間に石を刻むつちおと錘音が響く。石を組みたてる かけ声が溢れる。江戸時代のことである。全てが手作り、人の力と汗の結晶だ。その石橋たちは、健在だ。さまざまな表情をみせて輝いている。

石橋を目当てに訪れる人が多くなった。「すごいね」「どこにもない」「日本だね」と誉めてくれる。先人の残した英知と努力の結晶を改めてかみしめる。

郷土の誇りだ、大地に根ざした文化だ。大切にしていこう。語りついでいこう。かけがえない、私たちの宝なのだから。

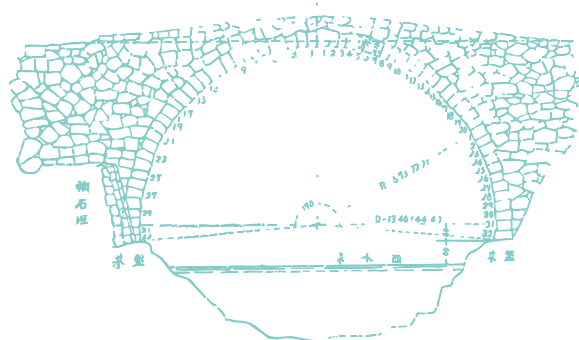
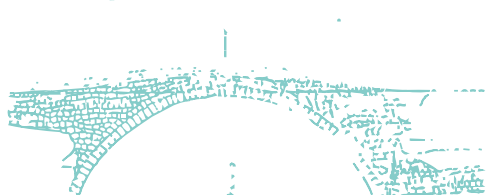
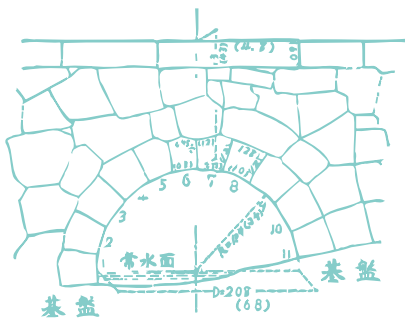
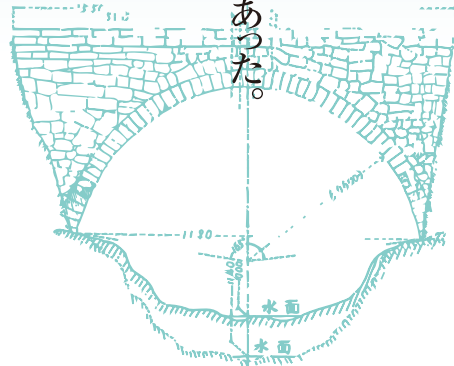
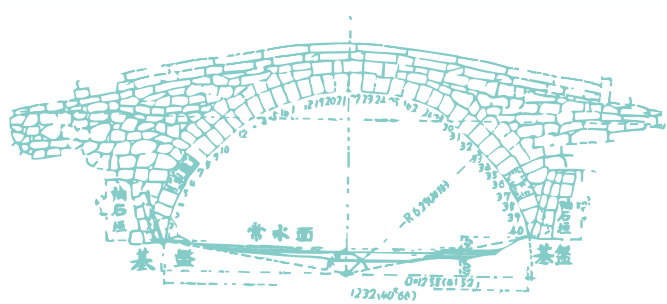
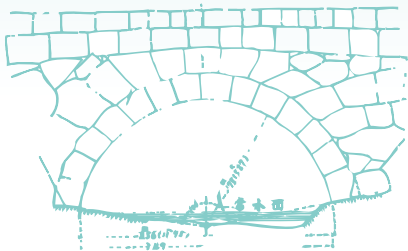
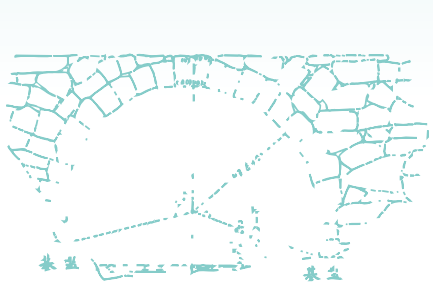
石橋が語り継ぐ物語の数々

一つひとつの目には見えない、石橋に込められた歴史を思いながら

ゆっくりと歩いてみよう、ゆっくりと。

それぞれ違う物語と魅力がそこにある。

緑川流域の石橋とふれあう旅へ……



目次

石橋に感謝 …… 42

〔石橋紀行〕

御船町 …… 40

美里町 そのⅠ …… 38

美里町 そのⅡ …… 36

山都町 そのⅠ …… 34

山都町 そのⅡ …… 32

甲佐町・宇城市・宇土市 …… 30

なぜ緑川流域に石橋が多いの? …… 2

石橋の生みの親「石工」たちの活躍 …… 3

どのようにして石橋はできるの? …… 5

石橋づくりに携わる人々 …… 7

石橋と人とのかわり …… 9

石橋ものがたり

三五郎が手がけた初の水路橋【雄亀滝橋】 …… 11

篠原善兵衛たちの団結が難所を克服【霊台橋】 …… 13

布田保之助の知恵が田畑を潤した【通潤橋】 …… 15

林田能寛の熱意が伝わった【八勢目鑑橋】 …… 17

石工たちは、優れた芸術家【下鶴橋】 …… 19

石橋と観光

緑川流域の石橋が観光客を呼ぶ。 …… 21

石橋文化とおもてなしの心 …… 23

石橋観光モデルコース …… 25

緑川流域の石橋たち【石橋マップ】 …… 28

発行 初版 平成16年度(2004年度)
第4版 令和3年度(2021年度)
熊本県県央広域本部上益城地域振興局
〒861-3206 熊本県上益城郡御船町辺田見396-1
TEL.096-282-3044 FAX.096-282-2050

監修 上塚尚孝(東陽石匠館 元館長)
制作 株式会社 マインド

石橋紀行

いしばしきこう

自分でだけの物語
ストーリー
歩くと見つける

